

野口幽香の生涯（続）

貝出 寿美子

三 晚 年

一 宮中修養講話御進講

太平洋戦争に入って、世は軍事色一色にぬりかわり、その騒然とした中でも、幽香には例年のごとく宮中より

「昭和十七年二月二十七日

皇后宮丈夫侯爵 広幡忠隆

来三月六日

皇后陛下御誕辰ニ付午後二時参内有之候ハバ皇后陛下拝謁可被仰付候此段申進候也

元女子学習院教授 野口ゆか殿

（別紙にて）服装 通常服

婦人ハ白襟付（白ハ重ネニ及ハズ）又ハ之ニ相当スル服追而参否御通知相成度」

右の様な書状が送られ、皇后様の恩師として毎年地久節に招かれる、自然な接近があった。皇后様は幽香にことのほか親愛感をお持ちになられた御様子であり、幽香のやわらかな心のぬくもりを感じるような話しをぜひ聞いてみたいとの思召と、戦争で御心労の多い皇后様を少しでもおなぐさめしたいという純粋な気持が一致し、ついに昭和十七年四月十七日第一回の修養講話がなされたのである。

幽香七十七歳の春であった。この御進講のことを幽香は次の様に述べている。

幸福な草庵の昼食、光耀といった経験がありますか、私は二度あります。まだ学習院在職中いろいろの煩悶の結果マヤ山に籠ったので、真剣に祈りつゞけましたよ、大正三年八月十五日この日突然次の様なお言葉が与えられました。エジプト記三章一〇―一三でした。「されば来れ我汝をパロにつかわし汝をしてわが民イスラエルの人々をエジプトより導き出さしめんモウセ神にいひけるは我は如何なる者ぞや我れはパロのもとにゆき、イスラエルの子孫をエジプトより導いたるべきものならんや、神いひ給ひけるは我必ず汝と共にあるべし」

渡辺先生がアメリカからのお便りがそれでした。私は貴族伝導と思ひ込みました。そして実行にうつりましたがやむなき事情のため中絶御心はそこになく、宮中につかわさるべきであつたのです。モウセも四十年の荒野の羊飼、宮廷とは思ひもかけぬことでした。モウセは神に御じたいしたしるし、神は「我必ず汝と共にあるべし」と仰せになつた。クリスチャンとしてこの言葉は実に強い、従はざるを得ない。今となつてあの時の御示しはこの事であつたかと知つたわけです。実に三十年の月日と試練の時、準備期があつたのです。なまやさしい事ではありません」……

「生命かけです。皇后様は昔を思召され御勞り心から野口を呼出して、しやべらせて下さる。何んとうるわしい事じやあませんか、一生の光榮です、あらん限りの力を傾注して御進講申上げる覚悟です。」

(草庵物語昭和十八年六月十三日)

と語っているのである。

御進講が実現するに至るには、伊地知幹子女官、保科武子女官長を始めとする、女官達の一致した強力な支持と、皇后官大夫広幡忠隆のなみなみならぬ労苦によるものであった。

日本は古来神権国家と称して居り、天皇はその祭主であられ、明治四年にはアメリカ公使が聖書を献上したがこれは失敗に終っており、いまだキリシタン禁止の思想がいちじるしく強く、信仰の自由がなかつたのであり、明治二十二年明治憲法発布に記念としてキリスト教矯風会が初めて聖書を献上したのであるが、それらはみな装飾的献上品として、すなわち、屏風や花瓶と同じようにあつかわれていたのであった。

それからみると、幽香の聖書進呈には大きな深い意味があったのである。幽香は、伊地知幹子の元に左の様な手紙を出している。

「かつてお手許にさし上げ下等のあの聖書あれをおすゝめ申上げたいのです。厚いものですから容易に御覧はむつかしいとおもいます。それで私は、まづ馬太伝の五章からぼつりぼつりとおよみなすつては如何でせう。そして山上の垂訓の一節づゝ御覧いたゞきお心におとめいたゞいたらどうでせう。そして次に静聴をおすゝめ申上げたいのです。毎朝十分でも廿分でも唯御一方様にて、静かに無念無想のお時間を お守りいたゞきたいのです。……もし御不審のあらせられました節におこたへ幾分でも御働せいたゞきましたら、野口にはわかりませんが、でも、先生方に伺い御答へ申上げる事できると存じます……。」

と記し、神道を表示する宮廷、しかももつとも弾圧のきびしかった戦争中キリスト教を持ちこんだ勇氣とその智慧は、多くの日本の戦に屈服した牧師達の持ちえない力であった。幽香は我が国のクリスチャンとしては何人も果し得なかったこの使命実現のために、献身するのであった。伊知地幹子女官、保科武子女官長等が、幽香を信頼してあつまつた二葉教会の会員であったことも実に大きな力であった。太平洋戦争の時局が一段とけわしく軍国主義が、神道復活を計つた排外の真只中において、幽香への絶対の人的信頼によって、初められたものであり、キリスト教道徳を基に、聖書の言葉を引用しつつ、人生訓を述べ、世界と国家の人間存在の在り方を平明に説きお聞かせ申し上げたのであり、一つの話しにも前途を見越した一貫した流れをもっており、御進講は戦中戦後を通じて十五回あり、

「昭和十七年四月 十七日 第一回

〃	五月二十一日	〃 二
〃	六月 十八日	〃 三
昭和十八年五月	十三日	〃 四
〃	六月 十八日	〃 五
〃	七月三十一日	〃 六
〃	十二月 二日	〃 七

昭和十九年四月二十六日	八
〃 五月二十五日	九
〃 七月 十二日	十
〃 十月二十六日	十一
〃 十一月 十六日吹上	十二
昭和二十一年十月二十一日旅行談吹上	十三
〃 十一月十九日呉竹沼津行啓吹上	十四
昭和二十二年五月二十一日祈呉竹	十五

第一回目の講話は、

「問題ハ人ジャナイ 自分デ生活ノ革新と云フ事ヲ申上ゲテ見タイト思フ
日常生活ニ真ノ満足アリヤナシヤ

古イ屋根ニ雨漏ガシテ修繕ヲ心ガケタ屋根屋ハコンナ悪イ屋根見タ事ガナイト云フ、一ト所直せば全体ガガタガタニナツテ愈々仕方ガナクナルト云フ左ラバトテ此儘デハ雨漏ガヒドク辛抱スルシカ此際根本的ニスツカリヤリ直セト云フ、大変ナ事ダ

此事件ハ如何ニモ人生其者ノ如キ感ガスル各自ノ生涯ノ屋根ハ、ドノ程度ノ修繕ヲ要シテ居ルカ完全無欠カ、ソレトモ修繕デハ及バナイ、全部ヤリ直シノ程度デアリハシナイカ、自問自答スベキ問題。

マジメナ多数ノ人ハ屋根ノ漏リヲ承知ダシ何トカシナケレバナラヌ事ニ重々承知ナガラ、サテ、如何ニ取扱フベキカ思ヒマドツテ居ルト云フノガ真相デアルマイカ」

自己ヲ知ラス自己ノ姿ノ見ニクサ心ハモツト見ニクイ

活動写真ニ自分ガ写ツタ時ノ感想（澄宮様）「人ハ知ツテ居テモナカナカ云ウテクレナイ」自己反省ノ出来ル人ハナゼアンナ事ヲスルカ

ト、相手方ニナツテソノ生イ立チカラ、現在ノ境遇、家庭ノ状態生活ノモヤウト、夫カラ夫ヘト考ヘテ見ルトソウナラナケレバナライ道筋ガチャントアル事ガワカル、タトヒ氣ニ入ラナイ事ヲサレタトテ、ヨク退イテ考ヘレバ文句ハ云ハナクナル、コレが先ツ第一デ次ニ相手ガ自分ニブツカツテ居ル場合ハ、①相手ノワルイ事デ自分ニトル ②赦ス事カ自己ヲ成長サセル。とあり、人間の精神改革、生活合理化の問題として提出され、その改革精神は宮中改革にまで発展し

第五回 六月十八日（昭和十八年）

御進講後の雑談

三千年ノ宮中ノ伝統変更スル事ノ出来ルノハ今程自由ナ時ハナイ歴史上残サルヘキ種々御改革モアラセラルベキ事ト考ヘル、国民ノ食物不足ニヨル子供ノ状態デ万事御質素ト御発表ハ国民ヨドレタケ引キ締ルカ小サナ事デモ実行スレハイイ氣持ニナル、例ハ古本古雑誌ノ始末シテモ人ノ為ニナリ自分ノ為ニナル」

と雑談中にも色々意見述べ、「歴史上残サルベキ種々ノ御改革」と戦争中すでに来るべき敗戦をみてとり予見して、

第十一回（昭和十九年十月廿六日）御進講においては、敗戦色濃い日本の現実、生活困難、絶望状態の模様を真実をおそれず進言し

「彼ハ落付イテ来ルヘキ運命ヲマトモニ向ヒアタカメラワナイデ信頼ノ応揚サデ、常ニ神ヲ仰キ而テ心ノ奥ニハ円満ノ将来ヲ明確ニ認メテ居ル」

と前書きし、

① 今日ノ世相ニ対シテ果シテ落付イテ居ラレルカ警報ガ出テモウロタエル自分、

② 運命来ルベキ運命トハ？爆弾・火事・負傷・死・餓・等々ニ対シテ果シテマトモニ向ハレルカ、タメラハナイデ恐シクナイカ？此内手近ナ恐怖ハ餓デ最モ早く迫ツテ来テイル空腹ハ逢ウ人毎ノ訴デ配給ノミデハ多分生キル事ハ六カシカロウ。

表向闇ヲシナイ人デモ闇デ得タ品物ヲモラヘバ間接、

カウ考ヘテ行クト闇ヲシナイ人ハ一人モナイト云ヒウルカモ知レス

或人ハヤミノ悪イ事ハ百モ千モ承知ダガ、夫ト子供達が見ス見ス弱ツテ行クノヲ見ルニ忍ビズ罪ト知り乍ラ今デハ自分モ許シヨスルト云フ

牧師ノ子供疎開シテノ通信ハ内ヨリ少シ多イオカズハ一品ダガ量ガ少ナイ只才漬物ガツク比ハウチニハナイカライイ、コノ間ハ梅干ガ二ツ付イタ素敵デシヨウト内デハ病氣ノトキ半分モラフ事ガアルノニ二ツトハゴウギナ事ダ、ナドト聞ク痛マシイ事ダ、冬ニ向ツテ居ルノニ炭ガ少シモナイ木ノ枝ヲ切ツテ御飯タキヨシャウト云ウ、シカモ老人ガアルノニコタツノ工夫ガドウシテモ見込ガツカヌト云フ」

③ 驚イタリアハテタリ逃ゲマドウタリシナイデ落付イテ応揚デ只神ヲ仰イデ居ル其姿ヲ想像シタイ

「我今汝等ノ為ニ受クル苦難ヲ喜ブ」

と聖書の教えを説き現実処理として戦争終結以外の手段なきことを述べている。

太平洋戦争終結で無条件降伏の決断は天皇陛下唯一の決断のごとく語られているが、そこまでの御決心迄に大きく導いていったものに戦争の真只中から平明にしてひたむきに、キリスト教精神を御進講申上げた幽香の勇氣ある働きは後世に大きく語り伝えらるべきものと信じる。その御進講が皇室の本来の平和主義を力づくよく後立していたことを、あらためて知らされるのである。

幽香は心から人間天皇を期待し、天皇のこの上ないお人柄を敬愛していたのである。

天皇のお人柄を知る記述をみると、

「めだたぬ洋装の御夫人がお二人端居して先生と静かに語つていらした。小倉女官と二番目の御嬢様であつたとか、

先生はニコニコしながら少し興奮しながら高山植物野外植物の二冊に目をなさず、「面白い話なのよ」と頁をくつていらつしやる「先達皇后様に献上した庭の紫銀カラマツね、あの花を皇后様は大変御満足でいろ／＼御下問があつたそうですよ。そしてね、天皇陛下はこの花は紫銀カラマツではない、ムサシ野に咲いている「カラマツ」だと仰せられる……いろ／＼御研究遊された結果宮中の研究所にて御尋ね遊してたしかに「カラマツ」だから野口にそういつて来いとこの事で今小倉さんがお出になつたといふわけだね」

「そう仰せでも私はむさし野に咲く秋のカラマツとは全く違う之はたしかに、タテシナに咲く紫銀カラマツと思ふのです。そう申し上げ

て頂く様にお願ひしたのです。

二十一年前学習院で園丁さん今二葉の本園のおぢいさんですよ、当時の植物の先生も教へて下さつたし、その後府立第二の絵の先生の植物の大家からも伺つてね、もうその先生はこの世の人ではないけれど」と、記るされ、

(昭和十三年六月一日草庵物語)

なおまた、

「昨日は特に照宮様にも御話申上げる事をゆるされたのですよ、途中陛下からお電話がかゝつて来てね、ヤブカラシにほんとうに藪を枯らすか、といふ御下問なのです、ここにもよく生えるのですが、枯れる迄おいておかないのでよくわかりませんと申上げたのですよ」

又、「先頃女官さんに今、野口の雑草園に何かあるかと御ききになり、色々申上げました中に、エゾエンビセンノウといふのにそれはまちがいであろう、山野に自生しない花だと、伺つてなり今一度よく見て来る様にとの結果、フシグロセンノウという花だと仰になつたそうで、ガンビは間違ひだつたのです。それからその池のそばにある二本ね……名前がわからないという事が御耳に入つたらしく、女官さん写生にいらつしやる、一本もつて来りませうと申上げたら、そんな事をしてはいけない二本きりないものを一本もつてくるなどとはとんでもない事だと仰せになり、写生して来る様にと仰せになつたのだそうですよ。」

(昭和十八年八月一日 草庵物語)

右のごとくであり、純粋な陛下の植物学者としての、片鱗がうかがい知れるのである。なお皇后陛下は幽香の参内の日にはお氣を配わり車をまわし、雨の日、雪の日心こまやかに体をおいたわり下さつたのであった。

幽香は真から兩陛下を敬愛して、日々過し、「献上した御傘はね、皇后様大変御氣に召して御自分が御さしになるとおつしやつたそうです。春の花影に、夏の青葉に、御散歩の時折御さしになる事でせう。どんなに美しいか光榮なる御傘ですよ」

(草庵物語 昭和十八年十二月八日)

と自分の献上した傘まで皇后陛下がお使い下さることに稚氣の喜びを表しているのである。

二 疎 開

「幽香日記」、昭和二十年八月十五日水曇、詔勅発表、戦争終了、歴史的な日、十二時詔勅が出る。陛下直接のラジオ御放送になつた録音

物ニシテ愈時も未タ感ガ深い今ハ時正午一同集つて拝聴涙の内ニ終ル総理鈴木氏の演説アリ条件思ヒノ外デホツトシタ陸相自決ノ報内閣総辞職ト云フトモ角戦争ハ止ンダサイレンモキコエナイノダ、間ガ抜ケタ様デ俄ニ別世界ニ引移ツタ様ダ疎開モ意味余リナクナル、自庵へ帰ルベキカ、利根へ行クベキカ茲ノ世話ニナリ切ルカ、自由ニ選ハレル事ニナツタ。

このころ、幽香は自分の身の置所を真剣に考えて居り食糧不足も手伝つて利根の島村に行くことしたのであった。

昭和二十年八月二十二日から二十一年六月三十日迄群馬県佐波郡島村新野栗原三次方に疎開するのであるが、幽香にとって疎開中つまり、島村時代が生涯のうち一番、幸せであつた。多忙な生活よりときはなされじつと自分をみつめる機会を神が与えてくださったのである。公私混合しない、きわめて厳格な人柄の反面、やさしいゆきとどいた思いやりが各所に散見されるのである。

昭和二十年十二月三十一日 日記

昭和廿年ノ苦難ツヅキノ一年モ過ギタ、田宮デ明ケタ元旦以来転々ト六カ所廻リ歩イタ琴サンノ勿体ナイ奉仕ニ愛ノ如ク日ガ暮レテ行ク事ハ有難イ、新聞カラウケル刺戟、食事ノ関心、手紙ノ往復子供達ノ消息ワケテモ桂之介ノ難義ママ商売人トノ無理解農村ラシクモナイ鋭ドサ誠ニ意外ノ事多ク琴サンノ難ムノモ無理ハナイ。

此事ニ在ツテ一年ヲ無事ニ通過シ通セル兩陛下ノ御上ノミシキリニ祈ル

御下賜金ハルバルト賜ハル帰ツタラモツト度々参内スベキデハアルマイカ自分ノ体カ日々衰ニナル耳ハ段々キコナナイ此間ノ眼マヒガ恐ロシイ、積木ノ色ワケタル大形ノムシロ材木トモ云ヒタイ柱ノ如キモノグラグラト眼前ニ動キ引クリ返ツテ来タ眼ヲパチクリサセテモ瞬間トマラズシキリニ眼ヲ閉ジタ次第ニ色彩動揺モ治マリヤガテ平靜ニ得ツタ、アノ儘無意識ニナツテシマウカ或ハ氣力狂ヒハセヌカト思ハサレタ。来ル日モ運命ニマトモニ向ヒ信賴ノ応揚サデ常ニアホギツツ此一年ヲ此界ニ住ハセテ頂コウ願ハシカラマセ給へ。

昭和二十一年一月元旦（金銭出納簿ノ一トを四つ切りにとじた日記帳）

此日記ノ紙ガ目下ノ生活ヲ如実ニ示シテ、居ルデハナイカ一人デ生活出来ナクナツタ老域ハ此立場ニ来テシナケレハワカル筈カナイ人ノ世話ヲ焼カネハ自己ノ生クル張モシナイ唯ニ諾ル天ニ居ルカ地ニ居ルノ時折今ノ空席カ一体ドウカ知ラネド思フ時モアル中、ブラリンフワ

リフワリ食事ハ人並ニ食べ以上ニサヘタベル寝ルコトニカケテハ人ノ幾倍力寝テ而シテ何モシナイイイカナト時折思ハサレル廿一年三月カ
四月旧居ニ帰ラレルダロウ信子一家ガ窮屈ニ治マツテ居ル所ヘ三疊ヲ横領スベキカ這入ツテ行クノダデモ時ハ春ダシ久シブリダシ庭ニ移レ
ルトキメルマダ広イト云ヘルノダ經濟モナントカナロウ生キテ居ル間ハ何ントカチンマリト治マツテ行クダロウ来ルベキ運命ニマトモニ向
カヒ此時雲ノ上ニ集注スヘキデハアルマイカ」

等々疎開中も常に陛下のお身のまわりをいろいろ心配され、いかに遊ばすかと、老の身に心を配って女官達よりの便りを待っている様子で
あり、利根川の土手にいつもさまよい、河原に出では野花を手折り、帰京後の御進言について思いめぐらしたり、句に心をまぎらわしたりし
て、二葉の小さきものへの動きをいかにかと思案するのである。島村の栗原家は二千坪もある大きなやしきでいつも河原にいますおばあさんと
村人達が云っていたが、女官長がたずねて来て偉い方なのだ、有名になったそうである。次の資料がその日の様子を示す。

昭和二十年九月二十二日土 小雨

準備シテリヤカーヲ迎ヒニ出ス昼食スマセテ待ツ武様、怒サン御案内御入り珍ラシク本宅ニオ迎スル大至急面会ノ御希望ヲ何事カト思ヘ
バ陛下ノ御思召ヲ下レハ使ヘル方法ノ一案ヲモタラセル、怒さん居ツテタワイモナク否定シテシマフ当家からエウトウドンノ御馳走二階
ニ移リ御日帰りノアハタダシサ何ソココニ利根へ御案内細雨来ソシテ一点ノ山客モ御覧ニ入レル事が出来ナカツタ

朝採集の狸豆献上、黄瓜、南瓜サツマイモ收穫等々重タシ

幽香は昔から紅梅が好きであったが、この島村時代も村はずれでも紅梅が咲いたと云うと杖をついてみに行つたそうである。

ひたむきに寒さにじっとたえ身をかたく、春のおとずれと共に気品高い薄紅の花をほころばす紅梅を人一倍愛した幽香は花の心にもいつ
しか、自分と共通したものを見出していたのではなからうか。

日くるとふと落合のすすきおもふ

小鳥鳴くいいいいよときこゆなり

紅梅の鉢もそれぞれ疎開かな

残菊の一枚疎開の宿にまで

暖かにその大御心毛糸賜ふ

戦後も幽香は、自分はキリスト教を知るお手がかりになればと云う謙虚な気持から、その道の専門の諸先生を、次々と紹介するのであった。

六月十四日 保科 武子

速達で植村さんの事お知らせをいただき恐れ入ります。早速申上げました。そう御親切なこととおよろこびでございました。この十八日皇族懇談会といふものが一月一度おありになり、此度は后宮様もお出まして、おきき遊みますのでまたこの次におたのみませうと、仰せでございました。このことを御親切におしらせいただきましたから一寸申上げます植村さんもたしかに召します、が志かし、やはり先生に、御案内になってお欲しい御様子どうぞおからだを御大事に遊しまして、お召をおまちになりますように、」

なお伊知地幹子の幽香によせた手紙は（十六通）戦中戦後の皇室間の様子をよく物語つて居り、幽香の愛弟子である伊知地、保科が、后宮のおそばにあつて大きな働きをなしたことは云うまでもない。

昭和二十一年五月九日 伊地知 幹子

仰せのように基督教が大分誤解されて来た様で、旧教新教の御進講が此間から御座居ました。旧約は田中耕太郎氏、新約は齋藤勇氏、齋藤氏の進講は大そうようございました。植村環さんも出発なさる直前に御召が御座居ました。御二方様に拝謁仰付られになりました。それぞれ二積極的によい事は取入れるようになって御進め申上げるといふ行き方で御喜びして居りましたが、去三月の異動で御人が代りましたから、今後如何様になるやらと、ひそかに御案じ申上げて居ります。塚本さんは、御進講があつたといふ事は伺いませんが、私の伺い洩らしかもわかりません御縮少で御淋しくなりました。

昭和二十一年八月十二日 保科 武子

「この頃は基督教の本の献上も公然と御座居ます。カトリックの尼さん達にも拝謁も御座居ます。御帰京になりましたら、御参内も御座居ますこと、その折の早々来ります様にと祈上げて居ります。」

其後幽香は八十二歳の老の身にむちうって、疎開で一時中断されたが、昭和二十二年五月まで戦後のあわただしい世論の中をものやわらげに、御進講を続けるのである。

幽香はこのころになると御進講申上げる内容については、身近な甥姪等や他方面の人々に相談して意見をとり入れている。

幽香の姪にあたる田宮信子の手紙によると

昭和二十年十一月十九日

「陛下への希望と云う事ね、博に話しましたら「僕が云ふから信子かけ」と云っていました。この間一寸人と話しているのを聞きました。が、つまり陛下と云ふものがもはや政治的方面や、国家のお頭と云うお役目でなく幸い、学問に非常に深い興味がおありになるから文化方面のお頭として御出発なされてはその事、言葉が私では変ですが、ともかく具体的には皇室財産の一部を、只今その諸施設に提供され、学問、芸術方面に今後貢献されるのが一番よくないかと、司令部からいろいろ指図を受けるのをまたず、積極的に陛下からそう云う風に乗りに出されるのがよいと云う様な事を云っていました。学問芸術に素晴らしい発展をさせた人にノーベル賞金の様なものを皇室財産より陛下御自身御下賜になられたら皇室財産の使い途もはじめて意義が出来るのではないかと云っていました。もはや国家の政治方面の権威ではなく、そう云う方面に活躍されて、はじめて今後の日本の国に御意義のある陛下としてのあり方がおありなさるのではないかと云っていました。又くわしくきけたらきいておきます。」

とあり、他方面の人々のいろいろな意見を参考にして勇氣ある御進講を進めるのであった。

「おしたか（お食事）も此頃は大変お粗末で折角おすべりをと思召しましたが、相悪代用食が上つたので何にも賜るほどのものもなく下されたのが、代用のお主食で、五月かけ、おうどん、とかではんとお土産にもあまりならず、お嬢さんの夜の御用意がはぶけるわけにもゆかず、実に御相悪くございました。」

昭和二十二年四月十五日 保科 武子

「官城もむかしのおもかげをおとどめなくおせまい御住居を遊されてをります。」

だれもだれもが苦しむのも志かたございません。

昭和二十二年十月三日 保科 武子

とあるように、まびしい御生活ぶりがうかゞわれるのである。

二、戦災児收容

二葉は戦後二十年二十一年は本来の保育に尽す余地なく戦争で新宿分園のみ残り、罹災母子引揚、母子戦災孤児棄児の收容保護で昭和二十年四月調布上石原に分園設立（深川母子寮の子供に戦災児收容）二十四年四月新宿本園跡に再建築し乳児部・保育部・母子寮を再開するのである。戦争でふみにじられた道芝の、春の芽ぶきのように二葉の方は幽香の志をついだ徳永恕が完全に任を果し、幽香は全ての安堵の中にその体をやすめることが出来た。なお二十年二月の空襲で深川母子寮が全焼した折母を失った子等の家をと、自分の庵の庭の一部に、その收容施設を作るのである。昭和四十三年迄の幽香庵青年寮がそれである。その際、幽香が長年大切にしていた深山の高山植物等、天皇陛下に献上して、ひとり心から涙して喜んでいたそうである。その際、庭の桜をきる時の句

幾十年めてにし桜あす切らる。

鋸はさえてさくらは切られゆく。

老いくちて切られゆくや山桜

とその思いをよんでいる。

三、逝 去

晩年は家の全てを藤井琴にまかせ、静かに日本古美術にその心をひかれ、ことに正倉院御物の熱心な鑑賞や阿弥陀如来の来迎図がことほか気に入っていた。日本美の追求、古寺巡礼は、その生涯で果し得た最後のやすらぎ、神の贈物であったのであろうか。

幽香は前から原書で英詩をよんでいるが、晩年、ブラウニングの詩にひかれていた。

「ブラウニングの詩は強い、私はこの詩によって元気が出る」

「もし全地が荒野であつてもたゞ我をして進ましめよ、進ましめよ、遂に或夕かの地につかんとたへず望みにみちつゝ」

「かつて一度も背をむけずいつも胸を張って前進しかつて一度も雲のたるゝを疑はす善か虚りらるゝとも悪が勝へしとは夢にもおもわず、

倒るゝは立たん為、敗るゝはより能く戦はん為、眠るは醒めん為と確信した人、人々の忙がしく活動せる真昼の頃、逝きし人と歎中をもつて挨拶してくれ、戦ひ進めあの世に於ても此の世と同じ様にやれと叫んでくれ。

なんと大きい言葉ではありませんか、彼にとつて死は希望のはじまりであつたのです老人に対しての福音です。死に直面している私にはこの言葉がほしい、どんなにうれしいかも知れません。死は決して悲しむべき事ではないのです。泣いてほしくない、私のユイゴンにも私が死んだらみなさんにたくさん御ちそうして下さいとたのんでいます。「眠るは醒めんため」永遠に生きる希望です。この確信をもっていなければ、生きてゆけません「人々の忙がしく活動せるまひるの頃」その気持で死者にあいさつをと、彼はいつています。私もそれがほしいです。私はふまれ通して生きて来た人です。「倒るゝはたゝんため」この力が幾度となく必要でした。

（草庵物語 昭和十八年六月十七日）

とその死に対する心がまえを積んでいたのである。

また、藤井琴が施設のお手伝さんが病気になり、たまたま連れてきた棄児をそのままずっと手元におき、毎日縁側で「ローバイ／＼」と英語の歌をうたったり、子守歌をうたつて、ほほずりし、真綿でくるむように大切に育てたのである、その棄児は幽香を「大ばばちゃま」藤井琴を「ばばちゃま」と云つて慕い、幽香は自分が最後の床につくようになって、毎晩だき寝して召されるその日まで、まづしい子等を身をもって守り育てたのであった。幽香が亡くなったその日、静かに横たわっている亡骸をみて、棄児は「おおばばちゃまとおねんねするのだ」といって泣きむずかり周囲の人々のいっそうの涙をそそつたのである。

神に召されるその日まで、自分の生涯をかけた貧兒及び棄児を守り育て、若き日に友に語つたようにいつかきつと、神の前、人の前に全てをさらけ出しても恥かしくない様になれると信じて進んだ幽香がキリスト教信仰により最後は文字通り、信仰と実践の見事なる結実、愛母の姿として、全くやすらかな静かなお召を迎えたのであった。

昭和二十五年一月二十七日享年八十四歳であった。一月三十日由木康牧師の司式により宮城春江略歴、渡辺善太式辞、内外の著名人の多くにつき従われて、ゆかりの東中野教会で白百合の花につつまれ、清らかな葬儀がとりおこなわれた。式が終りお棺が教会を去るとき、さつと進み

出で、うやうやしくお棺をかついだ人物があった。それが後に法相の犬養健であることがわかった。⁽²⁾多くの人々との、厳肅な永の別れであった。

- 1 田宮博、元東大教授、幽香の姪田宮信子の夫で、クロレラの権威者である。
- 2 藤井琴が昭和二十八年藍授宝章授与式の時、大臣室でお祝の昼食のとき犬養健が自分で幽香のお棺をかついだことを述べたので初めてわかったとの事である。

むすび

明治、大正、昭和三代に渡っての幽香の生涯をかえりみるに、これ程人生を有意義に送り得た女性は数少ないことをまず知らされる。数ある著名な女史連に比し大書して描かるべき功績を持ちながら、あまり派出くしいことをきらい、常にひかえめに自徳を譲る風がみられ、自己には徹底してきびしく清楚を好み、他には大きくやさしく包みこむ大きな包容性を持つ女性的女性みがきあげられた人間性にまず注目する。その人生は日本の夜明けそのものを物語るように展開されて行くのである。

明治二十一年幽香二十三歳、日本の歴史は表面的には西洋文化吸収の只中にあり、国づくりの基礎的段階であるが、内部的には、未だ非常な封建色そのものがあり、キリスト教洗礼などその多くが、排他視されていたその時期に洗礼を受け得たことは、深く信仰的なものへの傾倒なしには全く考えられないことであった。神の言葉に近づき入ると共に高く深く学究的に、全く純粹に聖書研究にあげくれ、そのためにはキリスト教の幾多の宗派の指導者の教えをこい、信仰的巡礼をしてさまよい歩くのであるが、ひとたび自分の魂の真空に徹するものが、聖書によって与えられ、その御言葉の権威の前にひれ伏すと、この巡礼は全く止み、貞節に殉じて神の僕としての徳を積んで行くのである。そのキリスト教的信仰と、社会的実践は見事に実り、明治三三年三十四歳にしてスラム街の子等を集めて、二葉幼稚園を創立し、片や貴族の子等の指導と同時に貧民の子も華族の子も分けへだてなく教育したのである。幽香の偉大さはこの点に集約されなければならない。

ここに宗教と実践が見事に花咲いたのである。幽香がそれ程スラム街の子等の為につくしたのならなぜ華族女学校幼稚園をやめて、二葉に一途にならなかったかと云う人もあるが、当時の情勢にあっては二葉幼稚園を大きく芽吹かすのも、幽香が華族女学校に居ればこそであり、ひいては上流階級と下層階級との大きな虹のかけ橋になるものがなくてはとの聡明な自覚によるものであった。

そして幽香の宗教的巡礼は逃避的感傷でもなく観念的遊戯でも無く、全く高く純粹な信仰的追求から生れ出たものであることが確認されるのである。信仰的所産の大きなものとして二葉独立教会の創立がある(後の東中野教会前身)一女性のひたむきな信仰に捧げられた生涯は、その一つの道より、幾多の大きな仕事が実り、日本が急激な資本主義化のあおりで無謀な大戦に参戦し、軍国主義の当時にあっても、昭和十七年から二十二年迄、勇敢にしかも堂々と、神道のメッカ宮廷に在って、その人間的信頼からキリスト教を平明にときあかし、その地の塩になつたのである。

「草庵物語卷十二大岡愛子著昭和十九年二月四日の一節に、「今云うのは少し早いかもしれないけれど「恩讐の彼方」の如くなるといふことです」という幽香の言葉がみ出される。日本人と米国人がにくしみの真只中であつたそのとき、幽香は一人静かに庵りで両国民の和解と人類の平和を熱心に静かに祈つていたのである。

幽香の純日本的なる趣味は(俳句・短歌・手芸・日本美術鑑賞等)武士的氣質に背景されて、士族の娘としての氣位が宿して凜とした風があり、極めて清楚自然の裡に高雅な趣のあるものが感じられ、晩年に住いた家も幽香の趣味を充分味わいするものである。

一見清楚静寂そのものの悟りに達したたはずまいをみるのであるが、その内に秘められたるものには、長い間の日本の趣味のものと、キリスト教信仰との調和に対する悩みぬかれた上に出来たものなのである。

比較的晩年になつて俳句・短歌・手芸・日本美術鑑賞にひたつていたのであるが、それは実に、絶えざる信仰的精進が日本的なものへのキリスト教的理解の再把握であり、日本が幕末の夜明と共に味わつた日本的なるものと、西洋的なものとの矛盾における、融合であり、異質文化の定着の縮図にも思われるのである。晩年はまことに気楽な余生であり、幽香のまわりには、ありとあらゆる階級の人々が集り、彼女からどんな悪口皮肉を云われようとまた集まってくる明るい生活であつた。幽香は昭和十三年の婦人之友に投稿し「私も七三歳の身ではございませうが、若い人達を助け、種まきの生活をよろこびのために生き、感謝を見出す生活をいたしたいものと思つて居ります」と語つて、信仰的精神はいつしか幽香を、美しく清められた悟りの域にまで運んだのであつた。

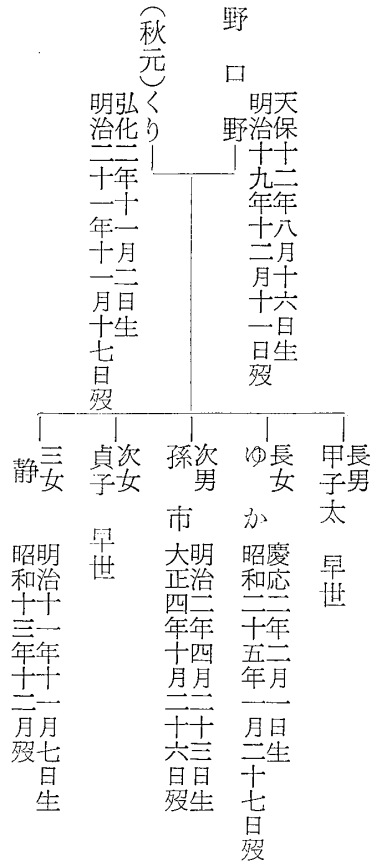
近代日本の黎明期における一女性の歩みのみにとどまらず、日本の大きな歴史上の足跡を担つた要めの人であつたことが大きく、浮彫され

改めて衿を正す思いにかられるのである。

ただ一人の生涯と云ってもその振幅が大きいゆえに、文字に表わしてとうていその全てをあらわすことは出来ないが、この一文が多少なりとも幽香を知る一つの手懸りとなれば幸せである。

このつたない私の仕事をするにあたり、幽香に関する数々の貴重な資料を御提供下さり、御指導御鞭達を賜った二葉保育園長徳永恕先生、理事藤井琴先生、由木康先生、浜田成義氏をはじめ御親戚友人の方々、元東京女子大学学長木村健二郎先生、青山なを先生、比較文化主任森岡健二先生、資料整理に当り西島百合子元助手、尾田恭子、佐波浩子助手の一方ならぬ御協力に対して深く感謝の意を表する次第である。

系 図



略 年 譜

年次	西 曆	年令	事 歴	参 考 事 項
慶応 二年	一八六六		二月一日播磨国飾東郡姫路清水二十九番屋敷に生る、ゆかと命名父野二十五才母くり二十一才(ゆか出生前長男甲子太早世した)	四月七日幕府学術修業及び貿易のための渡航を許す
明治 二年	一八六九	三	四月二十三日弟孫市生る	二月五日府県に小学校設置命ず
四年	一八七一	五	姫路の田島藍水の塾に漢学と英語を学ぶ	七月十四日薩藩置県、七月十八日文部

十二年	一八七九	十三	十一月十三日 十二才十カ月 上等小学第二級卒業 上等小学第一級卒業 〃 十一月二十八日 〃 上等小学全科卒業 (第三大学区兵庫県管内第二十九番、中学区飾東郡第二番小学校区 城東小学校) 十一月七日 妹静生る 十一月十三日 姫路中学入学	九月二十九日 学制を廃し教育令制定
十四年	一八八一	十五	六月三十日 父播磨国明石郡書記に任命され明石転勤と共にゆかも移住し花嫁修業始まる 四月十日 父兵庫県学務課専務を申付らる、それと共に神戸下山手通六丁目番外二百番邸に移住する	十月十二日 政府明治二十三年を期し国会開設の詔勅を發布する 一月 軍人勅諭を發布 三月 伊藤博文、伊東巳代治、西園寺公望、平田東助憲法調査のためヨーロッパに出発
十五年	一八八二	十六		八月 伊藤等ヨーロッパより帰国、十一月 鹿鳴館開館
十六年	一八八三	十七	ゆかは、なんとか勉強したい、東京へ出てお茶の水師範学校に行きたいと思うようになる お茶の水師範学校への志望強いが家の許しが得られず悩む	六月 鹿鳴館西洋舞踏会行わる、七月 華族令公布、十二月 秩父騒動
十七年	一八八四	十八		七月 女学雑誌創刊、九月 明治女学校設立、十一月 華族女学校開校式、十二月 二十三日 第一次伊藤内閣成立 文相森有礼がなる
十八年	一八八五	十九	二月十六日 両親に東京女子師範学校に行くことを許され、県庁で受験三人のうち一人合格、八月末日父と汽船横浜丸で上京、 九月二日 東京師範学校試験、 九月 東京師範学校入学	九月 共立女子職業学校設立、十二月 矢島楫子矯風会設立、三月 帝国大学令公布、四月十日 「小学校令」「中学校令」
十九年	一八八六	二十	十二月十一日 父四十六才肺炎にて歿、母くりは神戸を引揚げ姫路の小学校で編物教師で身を立てる	

二十一年	一八八八	二十二	十一月十七日 母くり四十四才で歿、ゆか悲嘆にくれる
二十二年	一八八九	二十三	五月 本郷森川町講義所において受洗、悲嘆のどん底の時級友塚本はまのすずめで教会に通い出したのがはじまり
二十三年	一八九〇	二十四	三月二十二日 高等師範学校女子師範学科卒業(女高師第一回卒業生) 四月一日 卒業式行われ総代となる
二十四年	一八九一	二十五	四月 同校助教諭に任ぜらる判任官五等給下給俸
二十五年	一八九二	二十六	十月 女子高等師範学校保母となる ゆかは卒業と同時に妹静を手元に引きとり神田区北神保町から下谷区西黒門町に移った
二十六年	一八九三	二十七	十二月 祖母梶歿、七十七才
二十七年	一八九四	二十八	卒業以来二十六年頃まで四年間は夢のように毎日が多忙に打過ぎて行った
二十八年	一八九五	二十九	四月 華族女学校に幼稚園設立され、助教諭の資格で女高師付属から移り、森島みねと二人で保母の仕事につく。
二十九年	一八九六	三十	
三十年	一八九七	三十一	
三十一年	一八九八	三十二	三月 ミスデントンの力添えで慈善音楽会開催ケーベル博士出演、その収益金の一部貧民幼稚園の基金となる

野口幽香の生涯

			「師範学校令」公布
			「日本人」創刊(三宅雪嶺)
			二月 憲法発布の日森有礼暗殺される
			七月 華族女学校永田町新校舎に移転
			三月 女子高等師範学校創立
			十月三十日 教育勅語発布される
			十一月 第一回国会開会
			二月 内村鑑三「不敬事件」おこる
			五月 ロシア皇太子襲わる
			十一月 「万朝報」刊、伝染病研究所設立
			四月 井上哲次郎「教育と宗教の衝突」刊
			八月一日 清国に宣戦布告(日清戦争)
			一月二十九日 高等女学校規定定める
			二月 明治女学校焼失
			四月十七日 日清講和条約締結
			一月 安井哲英国留学
			五月 足尾銅山鉍毒事件
			二月 富岡製糸所スト

年	月	事
三十二年	一月	麴町下六番町に貧児を集め二葉幼稚園設立、森島みねと二人発起人、二人とも華族女学校付属幼稚園勤務のかたわら保育事業に当った
三十二年	八月	高等女学校令公布 私立学校令公布 文部省宗教教育の圧迫始まる
三十三年	七月	安井哲帰国 津田梅子女子英学塾を創立 女学生えび茶袴姿流行をみる
三十四年	四月	日本女子大学創立
三十四年	一月	病氣のため願出により外国留学生取止む(安井哲と同居)
三十四年	一月	日英同盟協約ロンドンで調印
三十五年	六月	二葉幼稚園 男児十八人 女児十九人 総収入二二六七、五〇六円
三十五年	三月二十七日	専門学校令公布
三十六年	六月	華族女学校より大阪及び堺へ出張
三十六年	十一月	幸徳、堺等平民新聞刊
三十七年	六月	男児二十五人 女児十九人
三十七年	二月十日	日露戦争始まる
三十七年	九月	与謝野晶子「君死にたまうことなかれ」発表
三十八年	五月三十日	華族女学校教授に任ぜられる
三十八年	一月	第一次ロシア革命起る
三十八年	六月	二葉幼稚園 男児二十六人 女児十六人
三十八年	五月	日本海海戦
三十九年	十二月二十日	叙八等賜六級俸 御料地拝借許可四〇〇坪余無料
三十九年	九月	日露講和条約調印
三十九年	十月	YWCA発会式
三十九年	五月	北一輝「国体論及純正社会主義」刊
三十九年	六月	満鉄設立
三十九年	一月三十一日	叙正八位
三十九年	四月十一日	華族女学校が学習院女子部と改称 叙八等賜四級俸
三十九年	六月	二葉幼稚園甲武線鉄橋北御料地四四六坪九カ年六カ月無料拝借(報告)
三十九年	三月一日	移転 男児四十七名 女児五十三名 保母五人 主任一人
三十九年	十月	から翌年一月まで茅ヶ崎高田病院転地療養(結核)

年	日	事
四十年	四月二十五日	学習院教授幼稚園主事を命じられる
	六月	二葉幼稚園 総収入二七三一、八九二円 徳永愨二葉幼稚園に参加
四十一年	六月二十三日	高等官七等賜二級俸
	六月	二葉幼稚園 総収入三〇七七、四八八円 拝借坪数八八四・九寸明治四十七年十二月迄無料拝借の約 男児七十人 女児二十人
	七月三十日	叙従七位賜る
四十二年	六月	二葉幼稚園 総収入三五五五、三四七円 信仰的にプレマス派巡礼す
四十三年		二葉聖書研究小集会始む（幼稚園内で初めて長き聖書巡礼を経て初む、先きに西條弥市郎後に渡辺善太指導す）（きよめ派）
	六月	二葉幼稚園 総収入四二四四、六八九円
	十二月二十二日	年俸八五〇円 下賜高等官六等
四十四年	一月三十一日	叙正七位
	六月	二葉幼稚園 総収入三五四一、一九九円（十一月より徳永愨主任）
四十五年		二葉小集会、秋から講師渡辺善太渡米し御牧碩太郎（初めは野辺地天馬と交互に）講壇に立つ
	六月	二葉幼稚園 総収入一九四一、四三二円 現在園児 合一二〇名 卒業児数 三一九名
大正二年	六月二十五日	官内省 年俸九五〇円下賜
		二葉幼稚園に御大葬場の一部御下賜（高等官食堂） 保育室四小使室保母住宅等九〇坪増築 総収入五〇三七、九九三円 定員 二五〇人
三年	六月二十五日	高等官五等賜る
	九月一日	二葉幼稚園 総収入五八七一、六三二円 保母十人 建物坪数二六五坪 叙従六位賜る、この頃幼児教育と教会の仕事の転機について悩む
	四月一日	奈良女子高等師範設立
	六月二十二日	赤旗事件おこる
	十月十三日	戊申詔書下す
	十月	伊藤博文ハルピン駅頭で暗殺される
	五月二十五日	大逆事件検挙開始（幸徳秋水逮捕）
	八月二十二日	日韓合併条約成立
	五月	中央線開通
	九月	「青鞥」創刊さる
	十月	清国で辛亥革命おこる
	七月三十日	大正と改元
	九月十三日	明治天皇大葬、乃木希典夫妻殉死
	七月	中国第二革命拳兵失敗（孫文、黄興ら日本亡命）、この年アメリカのキリスト教伝道局日本にキリスト教主義女子大学設立を計画す
	八月二十三日	第一次世界大戦参加（ドイツに宣戦布告）
	十月	平民新聞刊

年	歳	事
四年	一九一五	四十九
	六月	二葉幼稚園 総収入 六六六〇、五一五円
	七月二十八日	年俸一〇〇〇円宮内省下賜
	十月二十六日	弟野口孫市歿(行年四十六才)
五年	一九一六	五十
	七月	二葉幼稚園を二葉保育園と改称、純救済事業として内務省所轄に帰す (三年未滿の者収容) 分園設立新宿南町四
六年	一九一七	五十一
	六月二十六日	高等官四等
	七月三十一日	叙正六位賜う
	二葉幼稚園	本園幼児数二六五名 分園幼児数一二八名 総収入 九七三六、〇二五円
七年	一九一八	五十二
	一月	二葉小集会で二葉独立教会と命名 日曜学校開く教師ゆか子供二三名
	六月	二葉保育園 総収入 八、四八六・二八円 幼児数 本園二四八名 分園一二四名
八年	一九一九	五十三
	六月二十三日	年俸一二〇〇円下賜
	二葉保育園	総収入 一〇八一四・六五円 (この頃仕事のつかれを感じ始める) 学習院出身者二葉婦人会始む
九年	一九二〇	五十四
	十二月二十三日	五級俸
	十二月	二葉保育園 総収入 六、五六五円五七銭 現在の賛助者五四四名 七〇六口 幼児数四〇六名 共働者十四名 (十月) 二葉独立教会御牧師辞任
	四月	伊地知幹子受洗
	五月	千駄谷野口宅で祈禱会
	十月九日	二葉独立教会に由木康牧師専任(二十五才)
	二葉保育園	総収入 六五〇・六五円 賛助員五二二名 七六五口 幼児数 本園一四七名 分園九八名 共働者 十名
十年	一九二一	五十五
	四月十一日	四給俸賜 学習院退職(二十八年在職)(依願免本官)
	四月二十六日	正五位勲五等宝冠章下賜される
十一年	一九二二	五十六
	九月	米価暴落
	一月	吉野作造「憲政の本義を説いて 其有終の美を済すの途を論ず」中 央公論発表、「婦人公論」刊
	三月	「主婦之友」刊
	九月	臨時教育会議官制公布
	十一月	ロシア十月革命ソビエト政権 成立
	八月二日	シベリヤ出兵
	九月	武者小路実篤等「新しき村」建設
	一月	松井須磨子自殺
	二月	大原社会問題研究所設立、東京 女子大学設立
	三月	市川房枝「新婦人協会結成」
	十月	賀川豊彦「死線を越えて」刊
	十月	「思想」刊
	十一月	原敬刺殺さる、中国魯迅「阿 Q正伝」
	八月十七日	有島武郎北海道の有島農 場を小作人に無償解放

年	昭和二年	三年	四年	五年	六年	七年
出生	一九二七	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二
死亡	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六
事件	<p>聖書研究没入 十月五日 由木康・谷口妙子結婚式 司会 山室軍平</p>	<p>二葉独立教会、新宿区上落合に教会敷地を購入し十二月献堂式を上げる 二葉保育園 共働者 園長一名 母の家主婦一名 主任一名 保母九名 実習者二名 小使三名</p>	<p>五月 本園建物木造二階建 母の家増設五一室 家族数四五名 人員一二八名</p>			
出来事	<p>十二月二十五日 大正天皇没、昭和と改元 五月二十八日 山東出兵 十二月三十日 上野浅草間最初の地下鉄開通 二月 初の普通選挙 三月十五日 共産党員全国的大検査</p>	<p>十一月 金解禁公布 五月 共産党シンパ事件(三木清、中野重治)</p>	<p>九月一日 関東大震災 一月 裕仁皇太子と久邇宮良子と成婚 七月 メートル法使用開始 三月 治安維持法公布 普通選挙法案議会通過</p>			
その他						

年	年齢	事件
八年	一九三三	六十七
九年	一九三四	六十八
十年	一九三五	六十九
十一年	一九三六	七十
十二年	一九三七	七十一
十三年	一九三八	七十二
十四年	一九三九	七十三
十五年	一九四〇	七十四
十六年	一九四一	七十五
十七年	一九四二	七十六
十八年	一九四三	七十七
十九年	一九四四	七十八

八年	一九三三	六十七	二葉保育園財団法人許可出願
九年	一九三四	六十八	二葉保育園財団法人となる
十年	一九三五	六十九	深川に母の家本位の分園開園 本園・旭町分園・深川分園三カ所に保育三〇〇 余名、母子六十五世帯、二〇〇余名一切の責任を徳永恕に譲る
十一年	一九三六	七十	聖書研究、趣味、二葉保育園に心を費す
十二年	一九三七	七十一	〃
十三年	一九三八	七十二	十二月四日 妹清田静歿
十四年	一九三九	七十三	余生を二葉保育園発展、聖書研究に日を費す
十五年	一九四〇	七十四	〃
十六年	一九四一	七十五	〃
十七年	一九四二	七十六	四月十七日 皇后陛下の思召により宮中において修養講話御進講 五月二十一日 参殿御進講 六月十八日 〃
十八年	一九四三	七十七	五月十三日 参殿御進講 六月十八日 〃 七月三十一日 〃 十二月二日 〃
十九年	一九四四	七十八	四月二十六日 参殿御進講 五月二十五日 〃 七月十二日 〃

五月	滝川事件
九月	室戸台風
十一月	湯川秀樹中間子論発表
九月	第一回芥川賞直木賞発表
十一月	昭和研究会結成 後藤隆之助等
三月三十日	文部省「国体の本義」出版
一月三日	杉本良吉・岡田嘉子樺太國境を越えてソ連に亡命
三月二日	文部省大学の軍事教練を必須にすると通達
三月	津田左右吉「神代史の研究」発禁
十一月十日	紀元二千六〇〇年記念式典
十二月八日	米英宣戦布告
一月一日	食塩通帳配給制実施
二月	衣料切符制実施
六月五日	ミッドウェイ海戦
七日	キスカ島占領
二月	ガタルカナル島撤退開始
十二月一日	第一回学徒出陣
三月	インパール作戦開始
七月	退却
六月	学童集団疎開決定（八月実施）

野口幽香の生涯	二十一年	二十二年	二十三年	二十四年
	一九四六	一九四七	一九四八	一九四九
	八十	八十一	八十二	八十三
	<p>十月 帰京</p> <p>十月二十一日 参殿御進講</p> <p>十一月十九日 //</p>	<p>五月二十一日 参殿御進講</p> <p>九月 二葉独立教会、桜山教会と合同して東中野教会と改む</p> <p>二葉保育園四月に調布上石原に分園設立戦災児収容に当る</p>	<p>戦争孤児収容に心を費やす</p>	<p>二葉保育園本園に乳児部保育部母子寮再開する</p>
	<p>七月 サイパン島玉砕</p> <p>十月 神風特別攻撃隊編成</p> <p>十一月二十四日 B29東京初空襲</p> <p>三月一日 硫黄島日本軍全滅</p> <p>三月十日 B29東京夜間大空襲</p> <p>八月六日 広島原爆投下</p> <p>九日 長崎原爆投下</p> <p>十五日 終戦</p> <p>十二月二十九日 第一次農地改革</p> <p>一月一日 天皇人間宣言</p> <p>五月一日 メーデー復活</p> <p>十九日 東京で食糧メーデー、プラカード事件</p> <p>十一月三日 日本国憲法公布</p> <p>一月二十日 学校給食始まる</p> <p>五月三日 日本国憲法施行</p> <p>八月 古橋水泳世界記録樹立</p> <p>十月十日 キーナン「天皇と実業界に戦争責任なし」と言明</p> <p>十月十三日 初の皇族会議十一宮家の皇族離脱決定</p> <p>十一月 極東軍事裁判判決</p> <p>東条等七名絞首刑(十二月二十三日処刑)</p> <p>七月 三鷹事件</p> <p>八月 シヤウブ勸告案発表、松川事件</p> <p>十一月三日 湯川秀樹ノーベル賞受賞</p>			

二十五年

一九五〇 八十四

一月二十七日 新宿区上落合の幽香庵にて逝去す（二葉保育園幽香庵青年寮）
一月三十日 東中野教会にて葬儀

一月一日 年令を満で数えること実施
(法律)

注 前号27巻の付記

70頁2行目 空川なる人↓宮川なる人（宮川経輝大阪教会牧師）

73頁6行目 山草会会員↓日本山岳会会員

93頁1行目 聖潔派に↓二葉独立教会に

98頁3行目 吉田先生↓吉田清太郎先生

98頁7行目 阿部↓阿部次郎

8行目 比屋根（安定）次ぎに海老名弾正、吉田清太郎を加える

99頁11行目 澄宮↓（三笠宮の幼名）

110頁 注の内「住友別邸を設計し」その次ぎに「妹清田静一家が居住していたので」を入れる